

連載コラム



みずき野と
その周辺の
植物と昆虫



第36回

水田と湿地の植物(2)～ タガラシ、セリなど～



もとよし ふさお
本吉 総男

2017年9月

前回の連載コラム第 35 回には、^{いちのだいはいし}市乃台橋から眺めた7月下旬の水田の風景写真を載せました。イネはまだ生育途上で青々としていました。あれからひと月あまり経た9月上旬、再び^{いちのだいはいし}市乃台橋を訪れました。イネは黄金色の穂を垂れ、すでに刈り入れが始まっていました。



^{いちのだいはいし}市之台橋から水田を望む 9月上旬



刈り入れ前の水田 9月上旬 本町地区

イネの刈り入れが終わると、水田やその周辺の植物も花期を終えて目立たなくなります。今回は季節をさかのぼって、主として春から初秋にかけて水田や水田のほとり、湿地に見られる植物について紹介します。

1 タガラシ

北海道から沖縄までの日本列島や北半球に広く分布するキンポウゲ科の越年草のタガラシは、茎の高さが30～60センチほどです。管理がよく行き届いているみずき野近くの水田では、ほとんど見かけませんが、水田の脇の溝や湿地によく見られます。開花は4～5月。噛むと口の中がひりひりするので「^{たがらし}田辛子」というのですが、これはプロトアネモニンという有毒物質によるものです。これが皮膚につくとただれるので、タガラシの汁には触れないよう注意が必要です。



タガラシ 3月下旬 貝塚地区

2 イヌガラシ、スカシタゴボウ、コイヌガラシ

これら3種はいずれも、水田のへりに生えるアブラナ科植物で、近縁の植物です。花はどれも黄色で小さく、よく似ていますが、実の形が違うので区別ができます。

イヌガラシは北海道、本州、四国、九州や朝鮮半島、中国、インドに分布する多年草です。高さは40センチ内外。花は4～6月に咲きます。果実は円柱形で細長く、他の2種と異なります。漢字では「犬辛子」と書きます。「犬」は気の毒な話ですが、なぜか「役に立たない」の意味で、「役に立たない^{からしな}芥子菜」ということでしょう。

スカシタゴボウは北海道、本州、四国、九州や北半球に広く分布する越年草です。茎の高さや外観は、イヌガラシによく似ていますが、イヌガラシより葉のふちの切れ込みが深く、実は長楕円形です。漢字では「透田牛蒡」と書きますが、名の由来はわかりません。

コイヌガラシは上記2種より茎がやや低く、30センチ内外です。果実は円柱形で柄がほとんどなく、葉の付け根に直接つきます。本州(関東地方以西)、四国、九州と中国大陸に分布する1年草です。日本では環境省により、準絶滅危惧種に指定されていますが、みずき野付近の水田のへりでたまに見かけます。イヌガラシやスカシタゴボウほど生育が旺盛でなく、またその生育地は除草されやすい場所なので、絶滅の危機に直面しています。



イヌガラシ 6月上旬 同地地区



スカシタゴボウ 6月下旬 同地地区



コイヌガラシ 6月上旬 同地地区

3 カワヂシャとオオカワヂシャ

カワヂシャとオオカワヂシャはオオバコ科の植物で、オオイヌノフグリに近縁の植物です。色は違いますが、花の形はオオイヌノフグリに似ており、またそれらの実もオオイヌノフグリと同様の形です。ただし茎はカワヂシャ、オオカワヂシャともにオオイヌノフグリよりずっと高く、40センチ内外です。

カワヂシャは北海道を除く日本列島と台湾、朝鮮半島、中国に分布する越年草で、水田の中やへり、または湿地に生え、5～7月に白い花を咲かせます。しかし、日本では数が少なくなり、環境省により準絶滅危惧種に指定されました。みずき野付近の水田やそのへり、または湿地でもたまに見られますが、



カワヂシャ 7月上旬 同地地区



オオカワヂシャ 6月下旬 同地地区



オオイヌノフグリ

3月上旬 本町地区

詳細は本コラム第11回「春の野の草花」を参照ください。

水田の雑草として防除されてしまう危険性があります。絶滅が心配されるもうひとつの原因は、次に述べるオオカワヂシャとの競合です。

カワヂシャは漢字で「川菘苳」と書きます。川に生えるチシャ(菘苳)という意味です。若い植物は柔らかく、食べられるので、チシャ(レタス)になぞえられたものです。

一方、オオカワヂシャはユーラシア大陸に原産する植物で、日本への侵入時期は不明です。カワヂシャと非常によく似ていますが、カワヂシャが白い花を咲かせるのに対して、オオカワヂシャの花は青紫色。また、カワヂシャの葉のふちにはギザギザ(鋸^{きよ}歯)がありますが、オオカワヂシャの葉には鋸^{きよ}歯がありません。オオカワヂシャはカワヂシャの繁殖地を奪う可能性があり、また、カワヂシャとの自然交雑で雑種(ホナガカワヂシャ)を作り、純粋なカワヂシャを絶滅させる危険性があります。そのため環境省

は、オオカワヂシャを特定外来植物に指定し、繁殖を防止する措置をとっています。みずき野近辺の水田近くでもオオカワヂシャを見かけるようになりました。

4 ミゾコウジュ、イヌゴマ、ハッカ

これら3種はそれぞれ姿が異なり、縁のない植物のように見えますが、いずれもシソ科の植物です。これらは、必ずしも水田や湿地に限らず、陸地の湿り気のある場所にも生えます。みずき野の付近では水田のへりによく見かけます。

ミゾコウジュは本州から沖縄までの日本列島のほか、アジアの亜熱帯、熱帯の地域に分布する越年草ですが、日本では年々数が減り、環境省によって準絶滅危惧種に指定されています。茎の高さは50センチ以上になるものもありますが、みずき野近辺の水田のへりに生えているものは、もっと小さくて、元気のあるものは見当たりません。ここに載せた写真は第2調整池の湿った場所に生えていたものです。

ミゾコウジュは漢字で「溝香薷」と書きます。コウジュ(香薷)とは、大辞林によればナギナタコウジュの別名だそうです。ナギナタコウジュは強い香りのするシソ科植物です。ミゾコウジュにも香りがあります。

イヌゴマは北海道、本州、四国、九州に分布する日本固有種です。茎の高さが50センチ内外の多年草。7～8月に淡紅色の花を咲かせます。漢字では「犬胡麻」。役に立たないゴマという意味で、花の色や形はゴマに似ていますが、イヌゴマはシソ科、ゴマはゴマ科ですから、類縁関係はありません。



ミゾコウジュ 5月下旬 第2調整池



イヌゴマ 7月下旬 貝塚地区



ハッカ 8月下旬 貝塚)

ハッカは北海道、本州、四国、九州と朝鮮半島、中国、樺太など東アジアに分布する多年草です。茎の高さは30センチ内外。花は淡紫色で、葉の付け根の上に群がって咲きます。葉をもんで嗅ぐと強いミントの香りがします。ハッカは漢字で「薄荷」と書きますが、名前の由来は不明です。日本では、いつ頃からかわかりませんが、ハッカの葉を煎じて薬として飲んでいたようです。明治時代になると、ハッカから精油を採る事業が北海道で始められました。この精油にはいろいろな成分が含まれていますが、主成分はメントールです。

ハッカの近縁種、セイヨウハッカから採れる精油は、ハッカの精油より香りが良いので、お菓子の香り付けによく使われます。セイヨウハッカは通称ペパーミントと呼ばれています。ただし、ペパーミントはセイヨウハッカだけに使われる名ではなく、広義には日本のハッカもペパーミントに属します。

なおメントールは化学合成できるので、現在では、合成メントールの方がハッカの精油から精製したメントールよりよく使われているようです。

5 アゼナとウリクサ

アゼナとウリクサはアゼナ科の植物です。小さな植物なので、ほとんど目立ちませんが、近づいて花を見ると美しさに気づきます。



アゼナ 7月下旬 市之台地区



ウリクサ 10月中旬 貝塚地区

アゼナは日本全土、アジア、ヨーロッパに広く分布する 1 年草です。水田のへりや湿地に多く、茎の高さは10～20センチ。ピンクがかかった白い花が7～10月に咲きます。アゼナの漢字は「畔菜」ですが、食べられるかどうかは知りません。

ウリクサは、本州、九州、四国のほか、アジアの温帯、亜熱帯、熱帯に広く分布する 1 年草です。水田のへりに近く、少し湿った場所によく見かけます。茎は15センチ内外で、地上を這^はって伸びます。花は淡紫色で8～10月に見られます。漢字では「瓜草」と書きますが、瓜の形をした実をつけるので、この名があります。

6 ミゾカクシ

ミゾカクシは日本全土のほか、アジアの温帯、亜熱帯、熱帯に広く分布しているキキョウ科の多年草です。茎は細く、地を這^はい、先が斜めに立ちあがって5～10センチほどの高さになります。花は淡紅色で、花弁は写真に示すような特殊な形です。漢字では「溝隠」と書き、溝を覆い隠すように繁殖するという意味です。別名はアゼムシロ(畦筵)といい、畦^{あぜ}に筵^{むしろ}を敷いたように広がるという意味でつけられた名です。しかし、みずき野の付近の水田で見たミゾカクシは、溝を隠すほどには広がってはいませんでした。



ミゾカクシ 8月上旬 貝塚地区

ミゾカクシは園芸植物ロベリアと近縁の植物で、両種ともロベリンという有機化合物のアルカロイドを含んでいます。ロベリンは呼吸困難な緊急時に呼吸促進剤として使われます。

7 コケオトギリ

コケオトギリは日本全土を含む東アジアに分布するオトギリソウ科の 1 年草で、水田のへりや湿地に生えます。草原に生える近縁のオトギリソウは茎の高さは50センチ内外ですが、コケオトギリは特に小さく、茎は15センチ内外です。コケオトギリの葉は卵型ですが、やはり湿地を好むアゼオトギリは葉が楕円形なので区別がつけます。コケオトギリによく似て小さい植物

にヒメオトギリがありますが、近畿以西に分布する植物なので、関東では両種を混同することはまずありません。

コケオトギリは小さいので、苔になぞらえて漢字では「苔弟切」と書きます。「^{おとぎり}弟切」はもちろん^{おとぎりそう}弟切草から来ています。^{おとぎりそう}弟切草の名は、鷹匠の家に伝わる秘薬の秘密を漏らしてしまった弟を兄が怒って切り殺したという伝説に由来しています。オトギリソウの葉には黒い点があり、飛び散った血の痕だというのです。しかし、コケオトギリの葉には黒点はありません。



コケオトギリ 7月上旬 貝塚地区

オトギリソウはヒペリシンという毒物を含み、食べた後に日光に当たるとひどい皮膚炎を起こします。コケオトギリがこの毒物を持っているかどうかは知りませんが、食べない方が良さそうです。

8 セリ

セリは日本全土のほか、アジアの温帯、亜熱帯、熱帯、オーストラリアまで広く分布するセリ科の植物です。湿地の水の中に地下茎を張って生育する多年草で、水田にも見られます。茎の高さは30センチ内外で、花は白く、7～8月に咲きます。

セリは春の七草のひとつとして、また春の香草として好んで食べられますが、花に関心をもつ人は少ないと思います。しかし、群生して咲くセリの花はことのほかきれいです。セリ(芹)の季語は春ですが、芹の花は夏の季語です。



セリ 7月下旬 上高井地区

芹を詠み込んだ歌が万葉集に二首あります。

天平元年、班田の時の使、葛城王、山背国より薩妙観命婦等の所に賜る歌一首

あかねさす 昼は田賜て ぬばたまの 夜の暇に 摘める 芹子これ
たたび いとも せり
かつらぎのおおきみ
 葛城王 (万葉集 4455)

(昼は班田の仕事で忙しいので、夜のいとまに摘んだ芹ですよ。これは)

薩妙観命婦の報へ贈る歌一首

ますらをと 思へるものを 大刀佩きて 蟹幡の田居に 芹子ぞ摘みける
たちは かには たゐ せり
せちのみようかんみょうぶ
 薩妙観命婦 (万葉集 4456)

(堂々とした立派なお方とと思っていましたが、大刀をつけて蟹幡の田んぼで芹を摘んで下さるとは)

葛城王の歌も、薩妙観命婦の返歌もユーモラスで、こんな歌にも万葉集の楽しさを見つけることができます。

● 追記 ●

以上2回にわたり紹介した植物の他にも、水田のへりや湿地に生える典型的な植物は多くありますが、これまでの連載コラムで取り上げてきたので、今回は触れませんでした。下記を参照してください。

● [第7回「カヤツリグサのいろいろ」](#)

カヤツリグサ科のアゼガヤツリ、カワラスガナ、ヒナガヤツリ、ヌマガヤツリ、タマガヤツリ、ヒメクグ、フトイ、サンカクイ、イヌホタルイ、ヒデリコ、テンツキ、ウキヤガラ、マツカサススキ、エゾアブラガヤ

● [第8回「美しいタデの仲間たち」](#)

タデ科のサクラタデ、シロバナサクラタデ、ママコノシリヌグイ、アキノウナギツカミ、ヤノネグサ、サデクサ、ミヅソバ、ヤナギタデ、ボントクタデ

● [第13回「イネ科の植物のいろいろ\(初夏から盛夏まで\)」](#)

イネ科のイヌビエ、ケイヌビエ、チゴザサ

● [第16回「イネ科植物のいろいろ\(晩夏から秋へ\)」](#)

コブナグサ、アシ、オギ

● [第23回「イグサとスゲ」](#)

イグサ科のイグサ、カヤツリグサ科スゲ属のアゼスゲ、アゼナルコ、ミコシガヤ、ヤガミスゲ、カサスゲ